

	ふくはら かずのり
氏 名	福 原 和 則
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 449 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 19 年 3 月 26 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 3 条第 3 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 论 文 題 目	村野藤吾の設計プロセスに関する研究
	(主査)
審 査 委 員	教授 竹内次男 教授 石田潤一郎 教授 船越暉由

論文内容の要旨

本論分は、建築家村野藤吾（1891-1984）の設計プロセスを分析し、彼の設計方法や、意図するデザインを実現するための設計上の工夫、時系列に沿った建築設計の進め方を明らかにするものである。村野は早稲田大学卒業後、大阪の建築家渡辺節の事務所において、10年余り歴史様式による建築だけを設計した。1929年に独立した村野は、初期作品において歴史様式を参照しない、当時のヨーロッパにおける新しい表現方法を用いた。仕事から遠ざけられた戦時中を経験したが、その後は近代主義建築の全盛期において自由な建築表現で建築をつくり続けた。中世の工匠のようにつくりこむ制作プロセスが部分的に紹介され、建設界の伝説となっているが、その実際は知られていない。本論分は京都工芸繊維大学美術工芸資料館に所蔵される村野藤吾の設計図面に即して分析し、村野の設計プロセスの全体像を明らかにした。

第1章では、研究資料である京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵の村野藤吾の設計図面を分析し、設計図面が村野藤吾のものづくりにおいて果たした役割や村野、森建築事務所における設計図面の位置づけを検証した。一方、保管される設計図面の特徴を明らかにした。

第2章では、村野藤吾の独立後の第一作、森五ビル（現近三ビル）の設計方法を、彼が渡辺事務所において最後に担当した歴史様式による綿業会館における MACKIM, MIED&WHITE 設計事務所の作品を参考する設計方法を検証することを通じて、初期における村野の設計方法が、渡辺事務所時代のものを継続したものであり、歴史様式が持つ寸法感覚や形態表現を近代建築の表現方法に置きかけたものであることを明らかにした。

第3章では、戦時中「美術建築家」として仕事から遠ざけられた事実に注目し、当時の作風とその評価を検証した。さらに自ら「美術建築」について建築を語った記録を検証し、彼が理想像とした「美術建築」の概念の根底にヒューマニズムが位置づけられ、その表現が、美の特質を持つ建築であることを考察した。彼が極限状態の中で設計した軍関係、工場関連の作品では、構造体の形状においてその表現を行なったことを明らかにした。

第4章では、戦後の代表作の一つであり、設計の過程を示す資料が多く残る日本生命日比谷ビルの設計図面を時系列に沿って検証した。初期においては、空間構成と平面計画の検討が複数案によって行なわれ、着工時にその骨格が決定した。続いて地下掘削工事の期間に構造設計と外観デザインが進められ、外観については、模型やモックアップによる検討、原寸図による確認が行なわれた。次にホール内部のデザインに移行し、模型による検証、実験、図面による確認が行われ、技術的な検討と意

匠的な検討が交互に加えられた。竣工間際に手摺やアートワークなどの部分詳細が検討された。村野の設計プロセスは、手順を踏んだ合理的なものであり、現場で建築が建設される過程のなかで、適切な時期に緻密な検証を積み重ねる方法を取ったことを設計図面の分析によって明らかにした。

第5章では、以上の知見をまとめて結とした。

論文審査の結果の要旨

村野藤吾については、雑誌や作品集において幅広く紹介されてきた。しかし学術論文として発表されたものは、岡島直方による《村野藤吾の「第三の立場」とその設計方法の源泉について》の1編を数えるのみであり、具体的な作品やそのプロセスに関するものはない。京都工芸繊維大学では、美術工芸資料館に村野藤吾の設計図面が寄託されたことを機に、村野藤吾の設計研究会が設立され、本格的な村野研究が開始された。本論文は、その成果の一部である。

本研究は、手付かずの状態であった村野研究を推し進める意味で非常に価値の高いものである。村野藤吾の重要資料である村野藤吾の設計図面に即して設計プロセスを分析し、彼の設計方法や意図するデザインを実現するための設計上の工夫、時系列に沿った建築設計の進め方をはじめて明らかにした。

第1章では、研究資料である村野藤吾の設計図面を分析し、村野藤吾のものづくりにおいて果たした役割や村野、森建築事務所における位置づけを検証し、その特徴を考察した。

第2章では、村野藤吾の初期作品である森五ビル（約4,000m²）の設計方法が、渡辺事務所時代のものを継続し、歴史様式が持つ寸法感覚や形態表現を近代建築の方法に発展させたものであることを明らかにした。

第3章では、戦時の軍、工場関係の作品から、彼が理想像とした「美術建築」の概念の根底にヒューマニズムが位置づけられ、その表現が、美の特質を持つ建築であることを明らかにした。

第4章では、戦後の代表作の一つであり、設計の過程を示す資料が多く残る日本生命日比谷ビル（42,878m²）の設計図面を工事工程の時系列に沿って検証した。

一般的に村野藤吾の設計プロセスは、中世の工匠のような方法をとり、ただひたすら制作に打ち込むものであると考えられている。しかしその実際は、極めて合理的に順を追って詳細に検討を積み重ねたものであり、技術と意匠の検討を交互に反復する方法を採用した。また、その設計思想は、表現のための合理性に重きを置き、構造と表現の一貫を目指した近代主義建築における合理主義とは一線を画したものであることを明らかにした。

これらの事実を設計図面に即して具体的に明らかにした点において、建築学特に建築意匠・建築史の分野における重要な知見を得たものとして、価値ある集積であると認められる。

基礎となった学術論文

- ①福原 和則「Reserch on the intension of Tohgo Murano in the design process of Morigo-Building.」、東アジア建築文化国際会議京都2006 論文集I、637頁～643頁（2006年）
- ②福原 和則「村野藤吾に関する美術史上の研究—造形と形成過程についてー」鹿島美術研究（年報第23号別冊）、483頁～493頁（2006年）
- ③福原 和則、竹内 次男、船越 晉由、「日本生命日比谷ビルにおける村野藤吾の設計過程に関する研究」日本建築学会計画系論文集（2007年5月）（印刷中）

その他論文

福原 和則「平和記念聖堂を見学して」 村野藤吾建築設計図展カタログ 2、16 頁

福原 和則「改修の現場～駒井氏からのヒアリングを通じて～」 同上 4、131～132 頁

福原 和則「設計図面から見る関西大学における村野作品」 同上 5、30～31 頁

福原 和則「軍事施設ならびに宇部その他国策工場」 同上 6、52～71 頁

福原 和則「山陰随一の名ホール・米子公会堂」 同上 7、42 頁

福原 和則「文化財としての日本生命日比谷ビル」 同上 8、80～93 頁